

棕の道草第21回 「私の好きな俳句」(前編)

山音

荒海や佐渡に横たふ天の川

やがて死ぬけしきは見えず蟬の声

松尾芭蕉

私が俳句に興味を持ったのは、松尾芭蕉『奥の細道』を読んだことがきっかけでした。2006年、群馬県高崎市から福島県福島市に転勤になり、誰も知人のいない土地ですべてが驚きの毎日。まずは言葉、イントネーションが尻上がりで不思議な発音、知らない音楽を聴いているようでした。それと環境、群馬も自然豊かでしたが、福島はスケールが違います。近くに吾妻連峰(2000m級)があり盆地なので、暑くて寒くて冬には雪が降る。1日の中に四季がある位の気温差に、早々体調を崩してしまいました。

引っ越して1年以上過ぎた頃、近くにあった図書館支所でたまたま『奥の細道』を借りて読んだのでした。文中に出て来る場所が身近にあったこともあり、紀行文も俳句もぐっと身近に感じ、俳句とはたった17文字で、こんな深くて大きなものを描けるのかと。それから福島県内はもちろん、東北各地を訪れるなかで様々な風景に身を置き、俳句もどきを書きつけていったのでした。不思議な福島(ふくすま)生活が、俳句と私を繋げてくれたのでした。

山枯るる音なき音の充満す

岡本眸

俳句を始めたといっても、最初は自己流。訳もわからず図書館で句集を端から読んでいき、好きな句を収集することから始めました。「音なき音」という表現に無限の広さを感じました。この方の「俳句は日記」という言葉は、今でも私のお守りです。

目にて言ふ千の言葉や雁の声

鷺谷七菜子

芯の強い、そしてしんとした世界を表現している句に目が止まってしまう。「目にて言ふ言葉」、これは結構深くて怖い。上の句にも通じるものを感じた。「見えないものを表現する」ということは、趣味だった楽器へのアプローチに通じるような気がした。

貌が棲む芒の中の捨て鏡

中村苑子

俳句は幻想的な世界をも作り出せることを知った、初めての俳人。その後、「物にみなはじめと終り寒雀」(中尾壽美子)や「慟哭のすべてを螢草といふ」(清水径子)のような、ほの昏い世界を有している俳人に共感するが多いことに気づいた。